



— 巻頭言 —

なに思う？ 今年 は

監事 三宮 敏和 (慶應大学)

平成16年、最初の学会誌発刊にあたり本会がますます躍進し、国民医療に大きく貢献できるような年になるよう、力を合わせて行きましょう。

さて、日本放射線技師会では「国民から見える職業へ」をキャッチフレーズに放射線技師という職業を社会的認知において確実な地位に位置付けられるよう、さまざまなイベントを繰り広げています。その中において放射線技師にも専門があり、認定があることをどれだけの国民が知っているのでしょうか。病院関係者でさえも殆んど知らないでしょう。

それよりも問題は、われわれ技師間においてもどれだけの人がそれぞれの部門に対して専門資格制度を導入しているか、また、どのようなプロセスを得て認定されているか、知っている人は少ないと思います。ただし、報道などで随分取上げられた乳腺撮影に関しては資格制度が理解され、社会的にも認知されてきています。また、ライセンスのほか施設に対しても評価をつけ、ホームページで開示しています。

そこで本会の『核医学専門技術者』はどうでしょうか？ 同じ技師の中でもどれだけの技師が知っているか疑問です。これは、私のところだけかもしれませんが。

そうです。標題の「なに思う？ 今年 は」は、核医学専門技術者認定制度をまずは病院関係者へ PR し、認知度を上げる方策・努力をしていきたいと思います。

このことは、近年、ローテーションが起因していると考えられる会員の減少傾向に歯止めを掛ける要因になればいいと思います。当然のことながら、部門内の資格制度に対する理解が一番大きい。

学会レベルでは、木下富士美理事が委員長を務める諮問委員会が中心になり、日本核医学会のバックアップを得るため、両学会間で共同認定についての検討委員会が設置されました。また、本会会員で核医学専門技術者でもある藤田日本放射線技術学会会長は、熊谷日本放射線技師会会長との会談のなかで、認定制度システムの整合に向けての調整を進めるとしている。この期に本会の認定制度も日本核医学会と平行して進めることも視野に入れて検討することも考えた方がよいかもしいと個人的に思います。

昨年9月、住んでいる地域で友人たち（技師）と川原でバーベキューを行った。そのとき、折角地域の技師が集まっているのだから飲み会だけでなく、放射線技師として地域に貢献できないだろうかということになり、「市民健康まつり」というイベントで放射線関連のブースを確保してもらい、各種検査の紹介（写真等）や相談コーナーを開催することができた。多くの市民がブースに来てくれました。その反応（住んでいるのは埼玉県飯能市）や興味の示し方を見ると、残念ながら核医学の認知度は低かった。逆に言えば特定の患者しか受診しないわけだし、一般市民が知る由もない。今後、核医学発展のための焦点を見極めることが必要であろう。そういった点で PET は大きな起爆剤もしくは原動力になる大きな鍵を握っている。昨年度の全国 PET 保有施設は54施設で、建設中や予定されている施設は増える一方である。学会や研究会・講演会など、どれを取っても PET で人を呼べる今日この頃である。

この2年近く監事として理事会に出席し、理事および事務局の方々が本会運営と発展のため努力しているのを見てきました。小堺学会長のもと、政治や社会でよく使われている構造改革は本会においても適時施行されています。私たち会員一人一人も協力し、本会を盛り上げて行く年にして行きましょう。